

Ken Noguchi

2010 野口健 活動報告書

「登山活動」「生物多様性の保全」「地球温暖化による氷河融解」
をテーマに、ボルネオ、ヒマラヤ、アフリカの現場を訪れて

協賛企業(50音順)

IWC(INTERNATIONAL WATCH COMPANY)

尾西食品株式会社

株式会社OPTILED JAPAN

コスモ石油株式会社

コールマンジャパン株式会社

ソニー株式会社

東京電力株式会社

株式会社ナベカキ

日本たばこ産業株式会社

日本ナチュロック株式会社

株式会社ニューバランス・ジャパン

株式会社ノエビア

株式会社ピュアライフ

株式会社フェニックス

富士急行株式会社

富士電機ホールディングス株式会社

メルセデス・ベンツ日本株式会社



目次

はじめに	3
野口健による現地レポート	
ボルネオ遠征	
東南アジア最高峰・キナバル山登頂記	4
オランウータンの悲鳴	6
ヒマラヤ遠征	
チュルー西峰登頂	7
念願のピサンピーク登頂！	8
ツラギ氷河湖へ	9
マナスル基金、新校舎を訪れて	10
サマ村清掃編	11
バングラディッシュ滞在記	12
アフリカ遠征	
なぜ、アフリカ遠征なのか？	14
ルウェンゾリ登山	14
ゴリラに会えた！	15
20年ぶりにケニア山レナナピーク登頂！	16
「ダーウィンの悪夢」の舞台・ビクトリア湖へ	17
フラミンゴが減少したナクル湖～	18
キリマンジャロ登頂報告	19
「センカクモグラを守る会」設立	20
メディア露出	22

はじめに

いつも野口健の活動へのご理解、ご協力ありがとうございます。

2010年の野口健の活動は、大きく分けて「登山活動」「生物多様性の保全」「地球温暖化による氷河融解問題への取り組み」といった3つのテーマがありました。

1月には、ボルネオ島を訪問。東南アジア最高峰・キナバル山への登山を行うなかで、キナバル山の入山規制や入山料システムをはじめとする保護管理体制について見識を深めました。また、オランウータンのリハビリテーションセンターでは、森林伐採のため絶滅の危機に瀕しているオランウータンの現状を視察し、他にもボルネオゾウなど多くの野生動物の観察を行うなかで、物凄いスピードで野生動物が減り続けている現実を突きつけられました。

4月には、恒例のヒマラヤ遠征を行いました。登山活動としましては、チュルー西峰(6419メートル)およびピサンピーク(6091メートル)への登頂に成功しました。

その後、以前から野口がライフワークとして取り組んでいる地球温暖化による氷河の融解の現状を確かめるため、ツラギ氷河湖を訪れました。これまでロウアー・バルン湖、ツォ・ロルパ湖、イムジャ湖を訪れ写真や映像で記録しICIMOD(国際総合山岳開発センター)や日本の氷河湖研究者に提供してきました。今回は、新たにツラギ氷河湖を視察し、データの蓄積を行いました。また、野口が理事長を務めるNPO法人・セブンサミッツ持続社会機構が行っている「ヒマラヤに学校をつくろうプロジェクト」の進捗状況を確認し、生徒と父母を建設中の新校舎に集め、今後の展開に関する説明会を開催しました。

そして、8月から9月にかけては、アフリカへの長期遠征を行いました。アフリカ遠征のテーマは2つあります。ひとつは地球温暖化による氷河の融解です。この数年間、野口はヒマラヤの氷河融解をテーマに、ネパール、ブータン、バングラディッシュを訪れ、現場の被害状況をレポートしてきましたが、アフリカの山々も同じ問題を抱えていることを知り、ケニア山、ルウェンゾリ峰、キリマンジャロ山への登頂を果たし、氷河の融解状況を視察しました。特に20年ぶりに登頂したキリマンジャロの氷河は明らかに小さくなっていました。

もうひとつのテーマは生物多様性です。たとえば、ビクトリア湖では、外来種であるナイルパーチを放流したことにより、完全に生態系が崩壊したといえます。その結果どのような状況が起きているのか。野口は様々な現実を「現場」で見ることになりました。

他にも多くのフィールドワークを行いました。詳細は本報告書に現地からの野口健本人によるレポートの形で掲載させていただいています。是非お読み頂き、野口健の活動へのご理解をいただければ幸いです。



キナバル・ロウズピーク(4095メートル)登頂!

2010年
1月~

野口健による現地レポート ボルネオ遠征

東南アジア最高峰・キナバル山登頂記

2010年1月5日から東南アジア最高峰キナバル峰を目指して日本を出発した。キナバル峰とは、赤道直下、ボルネオ島の北部マレーシア・サバ州にある山です。キナバル山は世界遺産地域内であり、登頂者は年間約2万人と多く、登山道保護もあり木道や木製による階段が多く設置してあります。

登山口から山頂まで距離にして約9キロ、標高差は2200メートル。これだけの標高差があるが故に、熱帯植物から高山植物、最後は山頂まで花崗岩が広がる岩場まで、実に様々な姿が混在している。キナバル公園はこれまでも100種類以上の哺乳類と300種類以上の鳥類が観察され、植物は5000種以上とのこと。それにしてもセミらしき生きものが「ミーン・ミーン」とジャングルの中は大騒ぎ。そして様々な野鳥の鳴き声も。ボルネオ島サバ州では536種類の鳥類が記録されているが、そのうち306種類がキナバル公園内とのこと。そのうち23種類が固有種、53種類が山岳性の種類。

キナバル山で特に印象的なのが山頂付近を覆っている花崗岩。約1500年前に溶岩が固まって今現在のキナバル山が形成されたとのこと。山頂アタック中、午前6時過ぎに丁度つるりとした花崗岩の上で日の出を迎えましたが、この花崗岩が朝日の光でピンクに染まりなんと

も美しかった。シーンと音のない世界。澄んでいる空気。その静けさの中で太陽の陽が照らし出す自然の芸術作品にしばし見惚れていた。

ただ、そんな時にガイドから「昔はここも氷河でした。山頂まで氷河があったのです。ただ、溶けてなくなってしまった」と聞かされた時には、「えっ」と驚くと共に年々、気候変動の影響により氷河が融解しているヒマラヤを思い出し、キナバル山での出来事が人ごとではなかった。

また、キナバル山の環境保護対策としては、ガイド同伴の義務があり、また宿泊施設数の数が限られているため、ガイドの情報によると、入山者の上限は一日192人までという。入山料金はキナバル公園の入園料は15リンギット(日本円で約500円)。キナバル登山の入山許可料は100リンギット(日本円で約3500円)。これに傷害保険料7リンギット(245円)加入も義務となる。

2009年1月7日、午前7時、無事キナバル山ロウズピーク(4095メートル)に登頂。4000メートル級の山でありながら眼下に海。海にジャングルに岩場。自分たちが立っている岩場の山頂からはジャングルや海の世界が展開している。つまり生き物の宝庫を山頂から見渡せる。生を感じるこの瞬間はなんと形容しがたい安堵感に包まれるものです。皮膚感覚で地球を感じていたのかもしれない。

2010年1月10日 ボルネオ島 コタ・キナバル市にて

オランウータンの悲鳴

キナバル山に登頂した翌日にオランウータンのリハビリテーションセンターに向かった。オランウータンはマレー語で「森の住人」という意味で、絶滅の危機に瀕している。

驚いた事にWWF（世界自然保護基金）の報告によるとオランウータンの個体数は100年前に比べると92パーセントも減ったとのこと。スマトラ島のオランウータンはこの75年間で80パーセント減。ボルネオ島ではこの60年間で50パーセント減。オランウータンの減少の最大の原因は森林伐採とことです。1980年代半ばまでボルネオ島では約75パーセントがジャングルでしたが、パームオイルなどのプランテーションを作るために広範囲で森林が伐採され今では50パーセント以下とされています。

移動の途中で、辺り一面が伐採された荒地があり、ガイドに聞いたら

「このジャングルはアブラヤシのプランテーションのために伐採されました。パームオイルはバイオディーゼルとして先進国に多く輸入されています。バイオディーゼルはエコと言われていますが、ボルネオの森はなくなりました」と言う。

そう言えば地球温暖化対策でバイオ燃料が注目されそのおかげでアマゾンのジャングルが伐採され代わりにトウモロコシ畑になってしまったと大きく報じられていましたが、まったく同じ事ではないか。

伐採されたジャングルのすぐ近くに中国系のプランテーション工場があり、モクモクと煙を吐いていたが、大量にジャングルを奪っていくバイオ燃料の何をもってエコなのだろうかと疑問を抱いていた。1月10日、オランウータンのリハビリテーション施設を見学しましたが、施設の職員は「森林伐採だけではなく、密猟による被害も大きい。ワシントン条約によってオランウータンの輸出入は禁止されていますが、毎年世界中にオランウータンが売られています。密猟者はオランウータンの子どもがほしいので親を殺して子どもだけ連れて行きます」と話していた。

その後、キタコバン川で野生動物観察を行い、運よく野生のボルネオゾウの群れと遭遇しました。現在、ボルネオ島のサバ州に生息するボルネオゾウは1000頭ほどだと言われています。ボルネオゾウもオランウータン同様にプランテーション拡大のために生息地域が狭まれ、行き場を失ったゾウたちが里に降りてきたところ駆除の名目で射殺されてきたとのこと。

何も知らされずに野生動物と会えるのなら素直に嬉しいのかもしれないが、エコツアーに参加すると色々な情報を教えてもらえる。故に時に気持ちが重くなったりする。一週間という短い滞在で多くの動植物と出会い、感激もしましたが、同時に物凄いスピードでこうした野生動物が減り続けている現実を突きつけられました。



施設で飼育されているオランウータン



2010年
4月～5月

野口健による現地レポート
ヒマラヤ遠征

チュルー西峰登頂

4月15日、午前2時半 チュルー西峰アタック開始。天候は快晴無風。日の出まではなかなかの極寒で、指先が冷えて痛む。手を揉みながら温めるしかない。

午前9時45分、チュルー西峰に登頂。7時間15分。山頂直下に巨大なクレバスが走り、厳密にいえば本当の山頂に立てなかったが、シェルパの話ではどの隊もここから先には行けず、我々が登頂したポイントを頂きにしているとのこと。

確かロブチェピークも同じような状況であった。とりあえず登頂できて良かったが、しかし、途中、パテパテに疲れ果て、座り込んでしまった。情けない。日頃からもっと体を鍛えないと。だらしのない登山をしてしまった。

ベースキャンプに戻ったのは15時30分。ざっと13時間かかった。反省はたっぷりありましたが、引きずってはいけない。気持ちを切り替えてこれからピサンピーク（6091メートル）に向かいます。ピサンピーク登頂予定は4月19日です。僕と平賀カメラマン、互いに疲れは残っているものの元気です。



2010年4月17日 マナン村にて



ピサンピーク登頂

念願のピサンピーク登頂！

チュルー西峰に登り、休むことなくピサンピーク登山へ。もともとピサンピーク登山は予定されていなかったが、チュルー峰を目指す道中、ピサンピークの横を通過した時にその雄姿を眺めながら、いつであったかピサンピークのハイキャンプで雪崩に流され撤退した出来事を思い出していた。

「平賀、予定にはないが、チュルーに登れたらそのままピサンを目指そう。休みはなくなるがそれでいいかな？」と聞けば「えっ！休まないでそのままですか」と応えてくるので「あとのスケジュールが詰まっているのでチュルーに登ったらそのままダイレクトでピサンに向かわなければならぬ」と。「了解です。わかりました」とその瞬間に決定。慌ててカトマンズに連絡しピサンピークの登山許可書を申請。スケジュール的には無理があったが、今はただただ我武者羅に山に登りたかった。

4月18日、時間に余裕がなかったのでベースキャンプに泊まらずピサン村から一気にハイキャンプへ。7時間で1800メートル登ったがこれがまた立派にきつかった。へろへろの毎日。

19日、午前3時45分、ハイキャンプを出発し、ヘッドランプの光を頼りに足場の悪い岩場を登る。我々以外にもドイツ隊が山頂を目指していたが、風が強く指が寒さで痛むと撤退。確かにアタック開始前から風が強くテントを出るのがいささか憂鬱であった。

アタックを1日延期する事も考えてみたが、ずっと天候に恵まれていた今回のヒマラヤ登山、少しずつ崩れていくのを感じていただけに早めに勝負をつけたかった。ただし、チュルー峰で苦しんだ高山病に関しては既に低酸素に順化できていたのでまったく影響なし。これは助かった。真っ暗闇の世界をただただ山頂を目指して会話もなくザクザクとアイゼンが雪を突き刺す音、またはカラランカラランとカラビナが岩を打つ音、そして「ハァーハァー」と自分たちが吐く息の音だけが響く。アタック開始直後は頭の中を様々な出来事がさ迷うが次第にそのような余裕もなくなり、次第に無心に近づくものです。

平賀カメラマンとアイコンタクトを交わすばかりで、会話らしいものはほとんどない。言葉の要らない世界。これがどれほど楽なものか。これ以上、贅沢なことはないのかもしれない。体力的には厳しかったけれども精神的には自由であり、いつまでもこの瞬間が続けばいいのにと、やはり山に救われた。

午前10時15分にピサンピークに登頂。山頂からの景色はマナスル峰、アンナプルナ山系、ダウラギリ峰と360度の大パノラマに平賀カメラマンと息を吸うのを忘れてしまったかのようにジッと眺めていた。「これでいい。これが自分なのだ」と、なにかを取り戻したかのように心身共に充実していた。

2010年4月21日 コテルマナン村にて



ツラギ氷河湖へ

ピサンピーク登頂後、次の目標はツラギ氷河湖。ネパールでは数十年前から氷河湖決壊洪水が記録されているが、「ネパールの水・エネルギー研究局」は、イムジャ湖、ディグ・ツォ湖、ロウアー・バルン湖、ツォ・ロルパ湖、ツラギ湖の5つの氷河湖は潜在的な決壊の危険性があると報告した。今までロウアー・バルン湖、ツォ・ロルパ湖、イムジャ湖を訪れ写真や映像で記録しICIMOD（国際総合山岳開発センター）や日本の氷河湖研究者に提供してきました。残る氷河湖はディグ・ツォ湖とツラギ氷河湖。

今回はツラギ氷河湖へと向かった。4月24日、4146メートルのツラギ氷河湖に到着。

温暖化の影響で「ヒマラヤの氷河が2035年には消失する」といった情報がIPCCの4次報告書に載り話題となったが、その後にそのデータに誤りがあったとIPCCが表明。この騒動により「ヒマラヤの氷河は融解していない」「地球温暖化はおこっていない」といった声が目立つようになったが、現場では確実に氷河は融解し続けている。

名古屋大学の藤田准教授も「この3年間の現地調査の結果、小規模の氷河は確かに後退しており、35年までに消失するのにも出てくるだろう。」（日経エコロジー）と指摘されている。ICIMODも同様の意見を持っており、これからも氷河湖問題に対し調査、または決壊対策に対しアクションを起こすべきだろう。

学者には学者の役割があり、登山家にもまた登山家の役割がある。大切な事は多くの関係者を含め、この問題が忘れ去られ、取り残されないようにすること。決壊し多くの犠牲者が出てからでは遅い。



ツラギ氷河とツラギ氷河湖の境

2010年4月25日



ツラギ氷河湖全容



建設中の新校舎の前でサマ村の子どもたちと

マナスル基金、新校舎を訪れて

現在、マナスル峰山麓のサマ村に学校建設中ですが、建物に関しては9割ほど完成。後は内装と暖房器具、そして寮のベッド。それとこれが最も大切ですが、水。学校の近くには安定して水が手に入る場所がないため、何処からかパイプで水を引っ張ってこなければならない。サマ村の上流になると約2キロのパイプを使わなければならないが、長すぎるような……。これは専門家の意見も聞きながら至急取り組まなければならない。

第2次工事はもう間もなくスタートしますが、食堂、グラウンドの整備、などなど。4月26日、清掃後、生徒達と父母を建設中の新校舎に集めこれからの経緯についての説明会を開きました。学校計画を発表した頃は、親の中には「子どもは労働力。学校に子どもを取られてはたまらない！」といったような反発もあったものの、あれから3年。そのような意見はごく一部になりつつある。少しずつであるが教育の意味を理解しようとしている。

今現在使用している校舎はまるで馬小屋のように狭く暗く、こんな所で勉強しているのかと不憫ですが、もう少し待って頂ければ、明るく広い新校舎に移れる。子どもたちも初めて訪れた新校舎の中を見学し大喜び。

そして、秋田県立大学の二村宗男助教授と研究室の学生たちが今年2月にサマ村入りしソーラーシステムを設置してくださった。おかげで寮の各部屋が明るくなりました。本当にありがとうございます。またこれもとっても嬉しかったのは彼らが日本からランドセルを20個ほど集めてくださり、これが大人気。もちろん、ネパールにはランドセルがないので初めて見るランドセルに「うわー」と目をキラキラさせながらおおはしゃぎ。ランドセルには寄付して下さった日本の子どもの写真やメッセージが書いてあり、村の子どもたちも「日本のみんなにありがとう！」と嬉しそうでした。近いうちに再びサマ村入りしますが、それまでにさらに100個ほどのランドセルを集めたい。

2010年4月25日 サマ村にて

サマ村清掃

4月26日、サマ村にて学校の子供達と清掃活動を行った。この清掃活動も2006年に訪れてから毎年のように行われてきた。最初の頃は何がゴミで何がゴミじゃないのか分かっていなかった村人。例えば落ち葉やヤクのフンを集めてくるので、「それはゴミじゃない」といちいち伝えなければならなかったが、今では清掃活動もすっかり慣れていてテキパキと手際がいい。村中ゴミだらけであったサマ村も今ではだいぶ綺麗になった。あれ以来、私がいなくても彼らによって定期的に村の清掃活動は継続されてきたのだ。

特に大人たちはなかなか清掃活動に参加しようとしなかったが、子どもたちは違った。率先して私たちの清掃活動に加わってくれた。

今回は小学生たちや一部の親との清掃活動。嬉しかったのは小学生のジグメ君が「ケンさんは毎年来るよね。僕たちにとっていいことだよ。でも、今度、ケンさんがサマに来るまでに僕たちが全部ゴミは拾っておくよ」とゴミ袋を担ぎながら語っていたことだ。少し時間はかかるがこうして活動を続けていけば必ず伝わるもの。次はゴミの焼却施設を造る計画。こうして1つ1つ着実に前へ前へ進んでいけばいい。

2010年4月26日 サマ村にて



2006年から毎年行われている清掃活動。村中ゴミだらけであったサマ村も今ではだいぶ綺麗になった





2年ぶりにハシャリ村に上陸して

「別れた友達に会いたい」
とシャキール君



バングラディッシュ滞在記

ベンガル湾に面し、広大なガンジス川が流れる国、バングラディッシュ。そこには、これまでに2度も、訪れたことがあった。垂直の世界を目指す登山家がなぜ？と思われるかもしれない。だがこの国は、深くヒマラヤと関係している。ヒマラヤの雪解け水は、インドのガンジス川に流れ、最終的にはその河口部のバングラディッシュに辿りつくからだ。

ガンジス川の水に「ヒマラヤの天然水」というようなイメージを抱く人もいるかもしれない。しかし、そんな清涼感のあるものは、まったく流れてこない。温暖化の影響で急速に融解した氷河が、怒涛の濁流となってバングラディッシュを襲っているのだ。この春、ヒマラヤ登山が終わった直後、胸騒ぎがして、衝動的に3度目のバングラディッシュに向かった。

まわりの友達や仕事仲間からは、「どうして野口は、こうも計画性がないのか」

と言われた。しかし僕の場合「今、行かなければ」と思った瞬間、もうその時点で計画は実行に移されるものなのだ。

そんなわけで3度目のバングラディッシュ。ガンジス川を遡り、もう何人も友人のいるハシャリ村へ。船旅の道中、何度も浸食の被害を目のあたりにした。人々は、浸食を防ごうと川岸に無数の竹を打ち込み、そこに砂が入った袋を引き締めていた。あの程度の竹と砂袋では何日ももたないかもしれない。どこも待ったなしの状況だった。

もうすぐかな、と思っていたとき、「野口さん、あれがハシャリ村です」

と、声をかけた。「これがハシャリ？」。2年前は、川岸が出っ張った地形をしていたのが、今では逆に窪んでいる。上陸し村人に話を聞いたら「ハシャリは、この3年間で300～400軒の家が流された」との言葉……。それを聞き、まず気になっていたのがハシャリ・バナリ高等学校だ。07年、はじめて訪れた時は川から上陸してすぐの所にあった。08年、2度目の訪問時は、流された直後……。しかし、その時、川から300メートル以上も離れた場所に、校舎の再築をしていた。300メートルもあれば大丈夫だろうとは思うが、やはり気になる。

「バナリ高等学校はもっと奥だっけ？」と尋ねたら「いや、すぐそこだよ」と指を指した。これには心底驚いた。何故ならばバナリ高等学校が上陸地点からそれこそすぐ目の前にあったからだ。まさかとは思ったが、本当にあの学校である。この2年間で、300メートルは浸食したということだ。学校と川を交互に見る。被害状況が分かりやすいと言えば分かりやすいのだが、なんとと言えばいいのか、つまり分かりやす過ぎて言葉を失ってしまった。「ハァー」と溜め息しかでない。

学校の近くを歩いていたら髭を立派に蓄えたサダム・フセイン似の男性が「ここにはめったに外国人は来ない。あなた方は前にも来てくれたね。ぜひ、家に上がってくれませんか？」と招待を受けた。彼の名前はドウラルシェイクさん(55歳)。

「まだ私たちはこの村に住めているから幸せだ。家を失ったほとんどの人がバラバラになっている。ダッカに出稼ぎに行ったまま帰ってこない人が多い。何故ならばここには彼らの帰るべき家がないんだよ」

飄々とした顔つきをしているが、言葉はやはり深刻だ。彼の息子のシャキール君(12歳)は「友達バラバラになってしまった。いなくなった友達に会いたい。どこに行ってしまったかも分からない。とても悲しいです。これから先、僕たちもどうなるのかわからないけれど、もし川が許してくれるのならこのままここで生きていきたい。それが僕の望みです」

時に恥ずかしそうにはにかむ12歳の少年だが、別れてしまった友達の話をする時は、無邪気な少年の目ではなくなっていた。「川が許してくれるのなら」少年のその言葉はズシリと重たかった。日本の社会でも、不況で、生活を脅かされている人々はいらる。しかし、日本での問題が甘くみえるほど、どうすることもできない凄惨な現実が、世界には溢れている。だが、世界の人々は、あきらめていない。ここバングラディッシュの人々は、愚痴を言う時間があれば、行動をしていた。だから、あれだけ過酷な状況下においても人々が生き生きと生きていた。必死に生きている。人のうねりを感じる。勢い、エネルギーを感じる。今、我々、日本人が忘れかけた生命力がそこにはある。

東京に帰り少し経ったとき、ネット上で、バングラディッシュの災害のニュースが流れた。

「6月15日にバングラディッシュ南東部で発生した豪雨による地滑りで、数十家屋が土砂に埋まり、少なくとも46人が死亡した」「6月後半、バングラディッシュ北部、北東部は、2週間にわたる大雨、上流からの鉄砲水により洪水が発生。十数万人が影響を受けている」

登山後、衝動的にバングラディッシュに行きたいと思ったのは、この惨事の予感が働いたからだったのだろうか。

僕は「川が許してくれるのなら」という少年の言葉を反芻していた。おそらく、あそこにいかなければ、わずか数行のネットの情報に反応することはなかっただろう。あの現実を見てしまった以上、僕は動かなくてはいけない。洪水問題の根源にある氷河融解の問題には、これからはもっと力強く、急いで取り組んでいこう。知るという事は同時に背負うことであり、なにも知らなければどんなに楽なことかと思うことも多い。圧倒的に大きな問題を前に、絶望を感じるときもある。それでもわずかな可能性を信じ、日々、具体的な行動を起こしていきたい。生命力のある、あのバングラディッシュの人々のように。

2010年5月3日 ダッカにて

2010年
8月～9月

野口健による現地レポート

アフリカ遠征

なぜ、アフリカ遠征なのか？

今年の夏、久々にアフリカ大陸を訪れた。今回のテーマはアフリカを思いっきり満喫すること。ウガンダ最高峰のルウェンゾリ山地・マリガリータ峰登山からスタートし、ブウィンディー国立公園にて野生のマウンテンゴリラ観察、そして舞台をケニアに移しケニア山登山、ビクトリア湖、マサイマラ国立保護区、ナックル湖へ。ケニアでの活動を終えたら次はタンザニアへ。キリマンジャロ登山にンゴロンゴロ保全地域でのウォーキングサファリと、1月半でこれら全てを経験しちゃうというそれこそアフリカ満喫ツアーとなりました。

何故、アフリカなのか。テーマの1つは気候変動による氷河の融解。この数年間、ヒマラヤの氷河の融解をテーマにネパール、ブータン、バングラディッシュに訪れ現場の被害状況をレポートしてきましたが、実はアフリカの山々も同じ問題を抱えているとのこと。特にキリマンジャロの氷河はそもそもヒマラヤと比較すると小さくその分だけ溶けて無くなるのも早いとのこと。それならば20年ぶりにキリマンジャロの山頂まで出かけ氷河の状態を比較してみることにしました。

もうひとつのテーマは生物多様性。例えばビクトリア湖では外来種であるニールパーチを放流したことにより在来種が撃滅し完全に生態系が崩壊したとのこと。その結果どのような状況になっているのか。また以前訪れた事のあるマサイマラ国立保護区などではどのような野生動物の保護をしているのか、また最近ではどのような問題があるのか。現場に訪れなければ見えてこない事も多いだろうと。そして何よりもアフリカの大自然を全身で感じたい！と8月中旬、アフリカ・ウガンダに向けて日本を出発した。

ルウェンゾリ登山

ルウェンゾリは「雨の山、ルウェンゾリ」と呼ばれるほど365日雨が降ると聞かされていましたが、登山期間の8日間、歩行中に一度も雨に降られなかった。究極な雨男のはずだったのですが……。ただ、やはり大半が霧の中。湿度が高いため、一面が苔のじゅうたんでなんと

ルウェンゾリ峰マリガリータピークに登頂！



ガリンガリンに凍りついた氷河を登る



美しかった。そして私が今まで登ってきた山の中でこれほど神秘的な世界があったらうか。

8月25日の山頂アタックは夜中に雷と雪が降りアタック開始できるのか微妙でしたが、雪が止んでいたためアタック開始。しかし、途中からホワイトアウトとなり、またクレバスが至る所で口を開け、視界がない中、ガリンガリンに凍りついた氷河をジグザグに登るのはなかなか大変だった。最終キャンプとなるエレナ小屋から4～5時間ほどで登頂できるかなぁ～と思っていましたが、なにになに7時間を必要とした。特に雪の付いた岩場は滑りやすく必要以上にロープで確保しながら進んだので時間がかかった。しかし、1つの小さなミスが命取りとなるのが登山。平賀カメラマンとガイドたちと慎重に一步一步山頂へ向けて登った。

懸念されていた氷河の融解は実に深刻でガイドのデジは「1991年にはエレナ小山まで氷河があった。毎年、目に見えて氷河がなくなっていくのが分かる。あと5年もしたらほとんどなくなるのではないかと話していた。

2010年8月31日 ウガンダ・カンパラにて

ゴリラに会えた！

ルウェンゾリ峰に登頂してから休むことなくブウィンディー国立公園へ。レンジャーとガイドと共に野生のゴリラを探しにジャングルへ。絶滅危惧種とされているマウンテンゴリラ。マウンテンゴリラはウガンダ、コンゴ、ルワンダの3カ国のみで生息していて、約700頭しかいないとのこと。その中でこのブウィンディー国立公園には約360頭が生息している。観光客の観察が許されているのは一日20人まで。



マウンテンゴリラがこれだけ減ってしまった理由の1つが密猟。隣国コンゴではマウンテンゴリラを殺して食べている人もいるとか。そして農作物を荒らすと農家の人々がゴリラの駆除を行ってきたそうです。いずれにせよ、密猟などによって700頭にまで減ってしまったゴリラ。今年、1月にボルネオ島でオランウータンを見てきましたが、やはりマウンテンゴリラと同じようにジャングルの伐採、密猟によってオランウータンも激減。

ガイドとレンジャーと共にジャングルに入ってマウンテンゴリラを探しましたが、前のグループは遭遇までに4時間以上かかったそうですが、なんと我々は30分ほどして突然ゴリラの家族に出会った。明らかに他を圧倒する存在感のボスゴリラを中心にハーレム状態。子どものゴリラが好奇心から我々人間に近づいてくるのだが、ガイドに下がるよう指示され少し離れた所から観察。時々、胸をボコボコと叩いて鳴らすゴリラ。約1時間、観察していましたが、このジャングルの中で野生のゴリラの生活をほんの少しだけですが覗き見る事ができ興奮。あっという間の1時間でした。ガイドには「1時間以上ゴリラに近づけばストレスを与える事になる」と言われていたので後髪を引かれる思いでしたが、バイバイとお別れをしてジャングルを後にしました。

2010年8月31日 ウガンダ・カンパラにて



ケニア山レナナピーク全容

20年ぶりにケニア山レナナピーク登頂！

ナイロビからケニア山へ移動。ルウェンゾリ峰で体を冷やしたからか、また連日の移動の繰り返しで疲れが出て来たのか、朝から寒気。どうやら風邪をひいたようです。そして本来、この時期は乾季のはずのケニアがナイロビ入りしてから雨ばかり。ケニア初日も夕方からドシャ雨。



ケニア山レナナピーク登頂

9月3日、メッツ・ステーションからマッキンダースキャンプへ。午前8時30分に登山開始も11時には再び雨。4000メートル付近からはミゾレとなり、雨具にポンチョを重ねるも全身が芯から冷えた。たださえ風邪気味であるのにこの状況は辛かった。そして怖かったのが雷。尾根を歩いている時に突然頭上でドドーンと雷が鳴った時は終わったかと思った。ザックを放り投げ木の下に身を隠したが、ガイドやポーターたちは鳴り響く雷の下を平然と傘をさしたまま歩いているのではないかと。雷に対する危機感が我々とはまったく異なるのに驚いた。「ケニアの雷は落ちてこないの？」と不思議でならない。

約4200メートルのマッキンダースキャンプに15時頃到着した時には唇が青くなるほど全身が冷え濡れた衣服を着替えすぐに寝袋の中でマン丸に。この標高で雨にミゾレは参る。そして夕方から頭がボーとし関節が痛んだ。熱が上がってきた。風邪薬を飲みアタック開始時間までジッと過ごす。

9月4日、午前2時、ケニア山レナナピークにアタック開始。昨夜までの悪天候が嘘のように一面の星空。体調不良で今一つ足が思うように進まなかったけれど、それでも一歩また一歩山頂を目指した。それでもあの美しい満点の星空を眺めながら歩いていたら気持ち的にはだいぶ楽になった。午前6時過ぎ、ようやく朝日が上がってきた。寒かっただけに太陽の光がまるで天然の毛布のように、その暖かな光に包まれる安堵感がなんともいえない。

午前6時34分、ケニア山レナナピークに登頂！20年前はルート上にほとんど雪がなかったが、ここ最近の悪天候で山頂付近はすっかりと雪化粧。印象があまりにも違いまるで違う山

に登っているようだった。この状況ならば軽アイゼンがあったほうが安全だろう。

山頂で約1時間、360度の地平線の世界にアフリカの大地を感じていた。そして真っ青な空に地球のエネルギーを浴びていた。これだから山は止められない。決して高度な技術を必要とする山ではないが、そんな事よりもこうしてまた20年ぶりに帰ってこられたこと、これまでの20年を振り返り、そして次の20年を想像しながらの一時間は私にとって最大の贅沢であった。

2010年9月5日 ビクトリア湖湖畔の町 キスムにて

「ダーウィンの悪夢」の舞台・ビクトリア湖へ

ケニア山から下山し、ヴィクトリア湖湖畔の町カセセへ移動。再び悪路をガタガタと揺られ続けること7時間。ヴィクトリア湖はケニア、ウガンダ、タンザニアに囲まれた巨大な湖。ナイル川の主流の1つである白ナイルの源流でもあり、100万年の歴史を持つ古代湖だとか。資料によれば多くの固有種が進化し生息する「ダーウィンの箱庭」として有名であったが、30～50年前(人によって言う事が異なる)にナイルパーチ(スズキ亜目アカメ科)が食用のために放流され、これまでに数100種類の固有種の大半が絶滅したとも言われている。ドキュメンタリー映画の「ダーウィンの悪夢」にも取り上げられ世界から注目されることになったヴィクトリア湖。

私もこの「ダーウィンの悪夢」を見ましたが、安易には言葉に表せないほどの衝撃を受けました。ドキュメンタリーで描かれている世界の全てが正しいかは分かりません。仮に最初からある程度、方向性など意図して作成されたものだとしても、その大半は真実を伝えているんだろうと、あの生々しい世界が物語っていた。

2日間の滞在などでその真相に迫れるはずもなく、ただ実際にヴィクトリア湖に訪れ漁師やガイドと一緒に漁に参加し話を聞けば何かを感じる事が出来るだろうと訪れてみた。最大で全長が2メートルを超え200キロ以上にもなる肉食の外来種ナイルパーチを、外敵から隔離され守られてきた固有種の宝庫である湖に放流すればどのような結末が待ち受けているのか素人で



ナイルパーチ漁の様子

も判断ができるだろう。日本でもブラックバスが同じような問題を抱えている。このヴィクトリア湖とナイルパーチの問題は生態系崩壊のみならずヴィクトリア湖周辺の人間社会にも大きな影響を与えてしまった所が悲劇なのである。

ナイルパーチは高級白身魚として欧州や日本にも多く輸入され続けている。湖畔の町にはナイルパーチの加工工場が並びヴィクトリア湖周辺では急激に人口増加。そして貧富の差が拡大し物価は高騰。強盗、殺人が増え治安は急速に悪化。ワニに襲われる漁師。生活苦から売春が蔓延しエイズが広がる。実際に私たちが取材した漁村も物価高騰に漁師相手に売春が蔓延り、コンドームを使う習慣のない彼らの社会にはエイズが瞬く間に広がったとのこと。魚を求めて売春に応じる女性も多いのだそうだ。

「ダーウィンの悪夢」に描かれていたごくほんの一部ですが、二日間の滞在で少しだけでも見聞きする事ができた。漁師たちのインタビューで印象的であったのが「ナイルパーチによって他の魚が獲れなくなったのは知っている。しかし、私たちにはもうナイルパーチしかない。私たちの生活はもう元に戻れない。今はそのナイルパーチも激減している。乱獲だろう。また水質汚染の影響もあるでしょう。いつまでナイルパーチを獲れるのか分からないけれど、獲り続けるしか生きていけないのです」

ナイルパーチ問題はアフリカ最大の汚点とも言われているが、しかし、ナイルパーチ漁を中心とした人間社会が既に構築されており、今さら時計の針は戻せないということなのだろう。「取り返しがつかない」というのはまさにこの事。そしてそのナイルパーチも日本に毎年大量に輸入され続けている。つまり私たちも無関係ではなく知らず知らずの内に関わっている事を忘れてはならない。



18キロのナイルパーチ

フラミンゴが減少したナクル湖～

5年ぶりにナクル湖へ。塩湖であるナクル湖は「世界一の鳥の湖」と言われ100～200万羽のフラミンゴの群が生息することで有名。僕が初めて訪れたのは20年前。高校生の時、キリマンジャロに登った後にふらりとナクル湖に出かけたのですが、湖面一面にフラミンゴ、そして



空を見上げるとペリカンが至る所に飛んでいて、その多さに驚いた記憶が未だに鮮明に残っています。今回は時期的な何かが影響しているのか分かりませんが、20年前に比べると減少しているのは明らかであった。

以前、JICA関係者の方にお話を聞いたところ、ナクル湖周辺も市街化、農地化が進み、また産業などで急激に水の需要が増え、ナクル湖の水位が下がったとのこと。そして汚染された排水がナクル湖に流れ込んだ。汚染や干ばつによってフラミンゴの餌となるバクテリアや藻が減少したそうです。また観光客の増加も影響あるだろうと。

ただ少なくなったとはいえ、フラミンゴは見ていて癒されますね。群はまるで薄いピンクのじゅうたん。撮影しホテルで確認したらまるで「絵」のような写真。距離が離れていたためにグッと迫るような写真撮影は出来ませんでした。ほんわりと癒される、のんびりとした雰囲気になったかなあ～と。

2010年9月11日 ナイロビにて



キリマンジャロ登頂報告

9月13日からキリマンジャロ登山(マランゲート)を開始し、16日午前7時45分にウフルピーク(5987メートル)に登頂。20年ぶりのキリマンジャロ。驚いたのは氷河が明らかに小さくなっていったこと。1万年以上存在していたキリマンジャロの氷河が2050年には消滅するという予測が公開されていますが、ズタズタに裂け、土に汚れた氷河の姿に「あながちあり得ない話でもないな」と感じていました。

地球温暖化説に対し様々な議論がありますが、いずれにせよヒマラヤやキリマンジャロの氷河は間違いなく融解している。これからもこの問題に対し注目し続けていきたい。そして登山者の多さ。最終の山小屋(キボハット)から山頂にアタック時はまるで夏の富士山のようにヘッドランプの行列がズラリ。山頂には数百人の登山者が。人、人、人。いや～本当に驚きました。流石はアフリカ大陸最高峰。ナンバー1が人を寄せ集めるのでしょうか、あの静かであったルウェンゾリ峰がなんと懐かしくまたとっても心地よかった。

2010年9月18日 アルーシャにて



可哀そうなくらい小さくなった氷河





設立記者会見を終えて 左から獣医学博士の山際大志郎先生、野口健、富山大学大学院理工学研究部准教授の横畑泰志先生

「センカクモグラを守る会」設立

2010年10月7日、環境省の記者クラブにて「センカクモグラを守る会」の設立発表記者会見を行った。会見には私と、友人であり獣医学博士の山際大志郎、そして、センカクモグラをはじめとする尖閣諸島魚釣島の生態系に関する第一人者である富山大学大学院理工学研究部准教授の横畑泰志が出席してくださった。質疑応答も含め、会見は1時間半におよび、テレビ、新聞、雑誌など多くのメディア関係者が詰めかけてくださった。

まずは、同会の設立の経緯を記したい。私は、2002年より東京都の「エコツーリズム・サポート会議」の委員として、主に小笠原諸島におけるエコツーリズムの推進に携わってきた。複数回の会議の中で、人為的に持ち込まれたヤギによる生態系の破壊が深刻化していることを知った。小笠原には、その土地にしか生息していない「固有種」が多く確認されており、ヤギをはじめとするいわゆる「移入種」により「固有種」の存在が脅かされていたのである。現在では、東京都の積極的な取り組みにより、ヤギの駆除がすすんでおり、生態系の保全に対する必要な措置がとられている。同会の名前に冠している「センカクモグラ」の存在を知ったのもこの頃であるが、尖閣諸島は、いわゆる領有権に関する問題により、適正な保全がなされていないとのことだった。今からさかのぼること7年前から、この問題に対して何かしらのアクションが必要だと考えていた。

尖閣諸島とは、南西諸島西表島の北方に位置する島嶼群であり、行政区域としては沖縄県石垣市に属している。魚釣島、北小島、南小島、久場島(黄尾礁)、大正島(赤尾礁)の5つの島嶼とおよび岩礁から成り立っており、中でも最大の面積をもつ魚釣島には、センカクモグラをは

じめ、センカクサワガニ、センカクツツジ等、多くの固有種が確認されている。しかし、1978年に、人為的に放逐されたヤギが数百頭にまで増殖したことにより、生態系に大きな影響を及ぼし、これらの生物の絶滅の危機が指摘されている。一例をあげれば、センカクモグラは、日本哺乳類学会により、危急種に指定され、環境省および沖縄県のレッドリスト(絶滅のおそれのある野生生物「動植物」のリスト)では最も絶滅のおそれの高い絶滅危惧IA類に指定されている。にもかかわらず、領有権に関する問題から、1991年以降、現在に至るまで一度も上陸調査が行われていないのだ。このような状況に対して、日本哺乳類学会は2002年度大会において「尖閣諸島魚釣島の野生化ヤギの対策を求める要望書」を採択し、環境省、外務省、沖縄県および石垣市に提出した。その翌年、日本生態学会および沖縄生物学会も同様の要望書を採択し、環境省などに提出している。また、2001年には国会議員から日本政府に対して政府の認識をただし、ヤギの除去の意思を問う質問趣意書が提出されているが、いずれも政府の見解は消極的であった。

今年(2010年)は、COP10(生物多様性条約第10回締約国会議)が愛知県名古屋市にて開催される。同条約の第8条では、「生態系、生息地若しくは種を脅かす外来種の導入を防止し又はそのような外来種を制御し若しくは撲滅すること」や「現在の利用が生物の多様性の保全及びその構成要素の持続可能な利用と両立するために必要な条件を整えるよう努力すること」と記されている。我が国は1993年に同条約を批准しているが、こと尖閣諸島に関しては、締約国として生物多様性の保全の責任を果たしていないと言えるのではないかと。このような思いから「センカクモグラを守る会」は発足した。記者会見後、「なぜこの時期に会を発足をしたのか」といった質問を多く受けた。その理由はふたつある。

ひとつはCOP10が我が国で開催されるということ、そしてもうひとつは、中国の漁船衝突事件が起き、領土問題として大きく報じられ、尖閣諸島に注目が集まっている今だからこそである。尖閣諸島の魚釣島の固有種を守るには、専門家による上陸調査を実施し、最終的に魚釣島のヤギを取り除くことが喫緊の課題である。ただし、これらを行うには、尖閣諸島を管理する日本政府・内閣官房の許可が必要であり、現状では世論の強い後押しのない限り、上陸をとる活動は不可能である。だからこそ、あえてもっとも世論に強く訴えかけることのできるであろう「今」に設立したのである。固有種は、全人類の共有の財産ともいえる。ただし、固有種ゆえに、一度失ってしまったら取り戻せない。小笠原諸島でも山羊によって固有種であるムニンツツジが絶滅の危機に瀕した。そこで徹底した調査、駆除を行った。

菅首相は「領土問題は存在していない」と断言されている。であるならば、尖閣諸島も小笠原諸島同様に、上陸調査活動などのフィールドワークが可能なはずだ。今後は魚釣島の生物多様性の価値と保全の緊急性を訴え、上陸調査やヤギの除去を行うことのできるように、政府へ要望していく。

2010年10月10日 東京にて

**尖閣諸島への上陸
保護活動が急務**
固有種調査で野口健さんら
絶滅危惧種のセンカク
モグラなど神保島・尖閣
諸島に生息する固有種の
現地調査などを実現しよ
うと「センカクモグラを
守る会」発起人でアルビ

ニストの野口健さん(37)
写真(左)らが26日、名古屋
市内でシンポジウムを
開き、保護
を訴えた。
トとして参
加した野口氏や富山大理
工学部准教授の横畑泰志
氏(50)らは、約50

人の聴衆に、尖閣諸島の
植生が爆発的に増えたと
告げ、同様に固有種のセ
ンカクモグラも絶滅の
危機に直面しているた
め、「上陸しての保護活
動が急務」とした。
野口さんらはこの日午
前、上陸の要望書を環境
省に提出。近く内閣官房

2010年10月27日
サンケイスポーツ



2010年10月8日
サンケイスポーツ

■尖閣の「モグラを守る会」
登山家の野口健さんらが7
日、沖縄県・尖閣諸島の魚釣
島の生息地を守るため、「セ
ンカクモグラを守る会」を
設立したと発表した。同島への
立ち入りは制限されてい
るが、動物植物の調査や、増
えすぎた環境に悪影響を及ぼ
しているヤシの駆除を政府に
求めていく方針だ。発起人の
横畑泰志・富山大理教授によ
ると、島には絶滅危惧(準々)
種のセンカクモグラを含め、
少なくとも11種の固有動物植
物があった。とりわけ昨年日本政

2010年10月8日
朝日新聞

尖閣の生物保全団体
野口健さんらが設立
した「センカクモグラを
守る会」が発足した。野口
健さんらが発起人となり、
尖閣諸島・魚釣島などに
生息し、絶滅が心配されて
いる「センカクモグラ」を
保全しようと、登山家の野
口健さんら(センカクモ
グラを守る会)を設立し、
7日に環境省記者会見を
開いた。発起人は、野口さ
んのほか、富山大理の准教
授志津野泰(動物植物学専
攻)、前環境省の山本大志氏
の3人。
センカクモグラは体長約
13センチの小形モグラで、
雄が1.5メートルに達する
地味な黒い毛皮で覆われ、
足は黒い。魚釣島では野口

2010年10月8日
読売新聞

危機は島だけじゃなかった！
環境省の絶滅危惧種に指定されて、約13
種ある一種「センカクモグラ」な
り。昭和54年に発見され、捕獲
と仲通し、尖閣諸島魚釣島固有種の
11種を守ろうと、アルビニストの野口
健さん(37)らが「センカクモグラを
守る会」を設立。7日発表した。
発起人の一
人で富山大理の
准教授志津野泰
志(動物植物学
専攻)は、絶滅
の危機に陥って
いる可能性が
ある。センカク
モグラは、平成
3年から上陸調
査が行われてお
るが、野口さん
は「今後、政府
へ調査

2010年10月8日 産経新聞

団体のメンバーが持ち込ん
だヤシが繁殖。植物が食い荒
らされて裸地が広がっている
ことが衛星画像などで確認さ
れた。野口さんは「政府は領土
問題はいいと断っている以上、
他の地域と同様に調査が
できるはずだ」と強調した。

**登山家・野口健氏ら
魚釣島への上陸調査訴え**
野口健さんらが発起人となり、
尖閣諸島・魚釣島などに
生息し、絶滅が心配されて
いる「センカクモグラ」を
保全しようと、登山家の野
口健さんら(センカクモ
グラを守る会)を設立し、
7日に環境省記者会見を
開いた。発起人は、野口さ
んのほか、富山大理の准教
授志津野泰(動物植物学専
攻)、前環境省の山本大志氏
の3人。
センカクモグラは体長約
13センチの小形モグラで、
雄が1.5メートルに達する
地味な黒い毛皮で覆われ、
足は黒い。魚釣島では野口

2010年10月8日 夕刊フジ

野口健事務所
〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-17-19
電話 03-3426-2487 FAX 03-3426-2452
野口健公式HP <http://www.noguchi-ken.com/index.html>
野口健 ブログ <http://blog.livedoor.jp/fuji8776/>

NPO法人セブンサミツ持続社会機構(野口健事務所内)
電話 03-5426-3592 FAX 03-3426-2452
公式HP <http://www.actions.jp/index.html>

